



放送淨曲私言

大隅大夫の寺子屋について

中 野 孝 一

放送淨曲を聴いてかれこれ批評がましい事を筆にするのは、鑑詰物ばかりの料理を喰べさせられて小言を並べるやうなもので、些かどうかと思はぬでもないが、文樂の上演曲目より放送のそれに却つて興味をそゝられる場合がまゝあつて、先達ての大隅大夫の「寺子屋」は、さういふ意味でよかれあしかれいろ／＼の點から心惹かるゝものが多かつたのと、それに關聯して言ひたい事もあつたので敢へて俎上にのせる事にした。放送による惡條件の割引はしてゐるつもりはつもりだが。

さて大隅大夫は極大雜把に分類すると、情味を語り生かす事を主眼とする古靱型ではなく、どちらかといへば力の表現を生命とする津大夫型に屬する人である。津大夫なきあとその後釜に擬せられそいふ風な語物をあてがはれてゐるらし

いが、その藝力に大きな運庭があるにもせよ、經歷や年配の點から言つて古靱に雁行し近い將來に文樂の双璧の一人になつてもらはねばならないこの大夫が、古靱とは全く對蹠的な藝質であるのは結構であるが、こまつた事には津大夫とは又別な比類なき大きい資質を恵まれ乍ら、どういふものかその力が内に充實漲溢して奔騰迸出する底の、聴手の肺腑をえぐるほどの會心の一曲を未だかつてきかされたことがない。

これは私の寡聞のせいもあつて、算盤高い文樂座の經營方針の犠牲になつて、口に適はない不得手のものを語り憫むでゐるのをきく折が多かつたにもよるだらうけれど、とにかくいろ／＼の不満が鬱積してゐたものか、もしくは眞底これに愛想をつかしてゐたものか、昭和十二年の春、息子さんを後繼者にしないのかと問はれて「こんなぐうたらな稼業はどう

でもよろしい」と、飛んでもない聞き捨てならぬ放言さへ發表するに至つた。私はこれを大毎の大隅藝談で讀んだ時の失望と寒心と憤慨を今でもまさ／＼と想起する事が出来る。至難の藝道——煩はしく厭はしきその社會の表裏——修行途上自分の藝に對する焦慮、不安、懷疑、なら勿論あり得ることであり、又當然なければならぬところのものであらうし吾愛兒に再び茨の道を歩ませたくない親心とすれば、これもさら／＼無理でもないが、神聖にして侵すべからざる藝道に對し不用意にもせよかゝる不遜の言辭を弄した心なさに啞然としてしまつたものであつた。當時早速淨曲新報紙上で猛省を促しておいたのではあつたが稀れなる大器を抱き重責を擔はせられつゝ、何時まで經つても何處かに一本楔のぬけてゐるやうな淨瑠璃をきかされてばかりゐると、又しても前の放言が思ひ出されて、さらでだに暗いこの藝術の將來が一層心細く思はれてならないのである。これは技巧的修練の不足よりも、藝道に對する愛とか尊敬とか信念とかの凝結した基本的な精神力の不足であるまいか？ かういふ大切な根本の心構へがしつかりと据つた上の修行でなければどうにもならないのだらうと私には思はれる。「そんな事はない。これでも一生懸命やつてをるつもりだ」と抗辯するかもしれないけれど肝心の淨瑠璃の出來榮は言はずもがな、床へ出た時の眼付のおちつかなさ、湯を濫飲する行儀のわるさ、かういふ見易い事にすらその心構へに至らなさをあり／＼と暴露してゐるで

はないか。自分の持つてゐるものゝほんとの良さ、自分の立場、責任の重大さに目覺めたら、大隅大夫たるもの決して晏如たり得ないはずだ。もうよいかげん大悟一番、血の通つた淨瑠璃をきかしてくれてもよかりさうなものと、思ふは私人であらうか。

寺子屋はかういふ儂ない切ない期待をいだいて熱聽した。

これは靜大夫時代、文樂の向上會（青年大夫の登龍門）で語つたのを、白井社長が聽ひて激賞したとかいふ極め付の逸品？ だときいてゐる。殆んど二昔も前の今より一層未完成の荒削りのものが、どれほど立派なものであつたらうか、文樂座の資本主であるが故に、淨瑠璃を聴く耳まで信用してよいものかどうかも疑はれるが、壯年時代の客氣霸氣といふやうな——純粹な藝の氣魄とは趣を異にしたものであつても、今の無氣力なそれと味ひ比べるとむしろ懷しまれる位の、一種の迫力が聴手を動かしただものに過ぎなかつたのではなかつたかと想像されるのであるが、それはともかく、其後昭和十年の秋に放送ではじめてこれをきかされて、期待を裏切られたにがい憶出もないではないけれど、何といつてもこの大夫にはもつとも最適の私には一番好ましい一曲であるし、この前にははぶかれた源藏戻りからだつたし、それこそ全心を耳にして聴き入つたのであつたが、遺憾乍らそこに六七年の間の修行の効果があまり現はれてゐないのに失望禁じ得ず、前敍の不満が依然解消しないのを悲しんだ次第である。

流石にあの堂々たる音量、重厚豪宕の藝質だ。語り出しの莊大さにこれならと思つてたのしんだのも束の間、早くも、「いたいけに手をつかへ」で、おや／＼と思はざるを得なかつた。子供の聲なりその地合を寫實に語らうとする小ささい意圖が、小廻しの利かぬ聲柄に裏切られてへんてこなものになつてしまつたのである。

次に「暫くは打ち守りあたりしが」のステテの語り方について言ひたい。これは打ちに重點をおくか、守りの方を重くみるかの可否について、三宅周太郎氏が古鞞大夫と津大夫との二様の語り口に對して、詳細適正の比較評をされた事があり、古鞞式の守りに重心をおく方が正しいのは動かす事が出来ないにも不拘、打ちの方に主力を注いで語つてゐる。このステテを一へ落すかギンへ落すかの、春大夫對、團平、湊大夫の相反した主張は、大夫の聲がその主張の分歧點になつてゐるのださうだから、これについてはどちらにならうとあまり干渉は出来ないけれど、前の場合の如き議論の餘地のない明白に正しいと決定されてゐる定石を無視する無頓着か片意地かは、不問に出来ない。

それから前後したが、「きつと見るより」のきつとが、あまりきつばりすぎで仰々しかつた。あそこはあゝした外發的なものではなく、もつと沈潜的な言ひ廻しでありたい。必ずしも合理主義の尺度ばかりで小股すくひをやるのではないが、あれではあの場合の源藏の心理なり動作なりにふさはしくない

のみでなく、耳ざはりで空々しくきこへる。しかしこういふ不満は聲柄による宿命的なものかもしれぬが、こちらにすればもう少しその氣になつてくれたら、何とかならないものでもなからうにと、つい愚痴りたくなるのである。

それよりも一番悲觀したのは「所詮御運の末なるか、いたはしや淺ましや」と、絶望する源藏の述懐の詞だ。これは若君の破滅だからといふ封建道德の主従觀念の發露のみではなく、吾子同様にいつくしみかしづき育てゝゐる子供の悲運を素直に嘆く源藏の測々としてせまる人間味の溢れた衷情の吐露なのである。彼の心の奥底に美はしくも咲ける純情の花なのだ。この氣持が強かつたればこそ、源藏はやつと無辜の子を無慙にも手にかけて得る勇氣を奮ひ起したのである。こういう觀方をして私はこの一語を源藏もどりの中でも重く味つてゐるにもかゝらず、實にひどかつた「所詮御運の末なる——」までを聲を顫はし胸が一杯になつた氣味で詞がこゝで途切れてしまひ、間を置いて前句の語尾の力を際立つて大きく「いたはしやあさましや」の頭にくつゝけて、すこし唄ひ氣味に詠嘆風に語る。「御運の末なるか」で悲嘆の情が溢れた形容なら、語尾のかは消えてしまつてきゝとれないのが當然ではあるまいか。實に沙汰の限りである。自分は凝りに凝つた研究の成果をきけとばかり、大得意になつてゐるらしいだけ聽手は助からない。前の「きつとみるより」は語手に成心がないらしいから我慢出来るが、この方はあざとい奇巧を

弄し過ぎての失敗だけに嫌味できくに堪えなかつた。

しかし「報ひはこつちも火の車」の、源藏の修羅地獄の苦惱と自責の嘆聲は、低めた深刻沈痛の語氣が實に結構至極で十二分に共感堪能させてもらへた。こゝに始めて大隅大夫の眞骨頭をきいたのである。こんな力の籠つた情のつんだ、脇の底へ煮えこむやうな立派な詞遣ひは、今までこの人からは一度もきかしてもらへなかつたのである。こういふ調子で一段統一されたものが語られたらとしみじううれしかつた。

このやうにめづらしく感心して聽いてゐたら「スハ身の上と源藏も妻の戸浪も胴をすへ」を、鼻へ抜ける口先聲で輕くヘナ／＼と演つたので、又腰を折られてしまつた一體全體どんなつもりであんなじや／＼した、腰拔節を語るのであらう。こゝは源藏も戸浪も、全身全靈を筋金の入つたやうに硬直させ、悲壯の決意の下に、この憎みても飽き足らぬ人非人の強敵を迎ふべきところなのである。

今一つは、源藏の「固唾を呑んで」のデが、はじめの「きつと見るより」のキツトと同じに大き過ぎた。これは源藏の切迫つまつた動きのとれぬ必死の決意を凝結した、大切な一句であるのだ。あゝいふぼやけた大きさは効果を逆殺して仕舞ふ。

最後に、「早首桶引き寄せ蓋引き明けた——」以下首實檢に至る場合に緩急の妙が乏しかつた事「女の念力」に迫力の足らないことなども默過出来ない不満に數ふべきだらう。松王

丸の「菅秀才の首打つたにまがひなし相違なし」の實檢證明の一言に、底を割らぬ程度の悲痛なふくみを、微妙に表現すべきだが、これが納得の行かなかつたのは是非もない。以上列舉した私の悲願が叶へられた曉は、期せずしてこの眼目の詞に當然畫龍點睛されるものと期待してゐる。

こうして一人よがりの見當違ひかもしれない駄目を並べて見たのを改めて吟味し反芻してみると。

第一は天興の聲質に却つて災ひされて、淨瑠璃が大きくなりすぎ締らない事、(例)「きつとみるよりや固唾を呑んで——」など)これはもつと基本的な發聲法の研究修熟も勿論忽諾に出来まいが、それよりも曲中人物の心を吾心とする事によつて、表現の適正を得るのではないかと思はれること。

第二は自己の資質を自覺せぬためか、もしくは他の私の知らない理由によるか、その柄にない小細工を弄してこまること、これについてはすでに前に書いた昭和十年九月に、同じ寺子屋の放送の時の短評にも卑見を開陳してゐるが。

「——語り出しの莊重雄渾さに似すその調子で押し切れなかつたのは惜しい私共この人に求むるところは、太い力強い線でグウーと一の字をかくやうに、たるみのない熱演であつて小器用な部分的な巧緻さを賞美するわけではないのです。たとへば「人でなしといはれむに」にあまり色をつけすぎたり「持つべきものは子なるぞや」に古鞆を模してもつと綺麗事で行かうとし、持前の地聲を殺して繊細な器用さをきかさう

としましたが、それでは美しい哀切感はずつとも現れなくて語りの不統一を徒に暴露したに止りました。堂々と地聲で押し切つても悲痛の風情は出るはずです——（下略）。

丁度この通りの不満はそのまゝ六七年後の今日に持ち越されて私を齒がゆがらすのである。此度は「所詮御運の末なるかいたはしやあさましや」にその弊がもつとも顯著に現はれてゐる。そしてこれは前よりも一層惡質で、病いよくに入れるものと慨嘆せざるを得ない。

しかし今の私はこの引用文中の「太いタルミのない單純化された熱演」といふ註文には、まだ言ひ足りないものを残してゐると感じてゐる。堂々と地聲で押し切れ」では、第一の例に挙げたやうな缺陷は是正出来なくて、大味な茫洋たる淨瑠璃になつてしまひさうである。

あまりに萬全を望みすぎるきらひがなくもないが、演奏全體の統一を破る低俗な迎合的な前受をねらつた小乗技巧の骨がらみになる事を、排除するつもりであのやうに直截に進言したもの、出来得れば全體の演出は太く大きく力強く、小細工は排してもよい意味の細心を忘れず、要々のカツチリと引き緊つた、求心的な淨瑠璃を語つてもらひたい。

最後に重ねて強調懇望しておきたい喫緊事は、もつと／＼まこと心のこもつた技巧を飛躍せしむる精神力の集中された淨瑠璃であつてほしいのである。藝を命といふわかり切つたことで、そして途方もない實行の至難な藝道の眞諦を自覺

實踐して欲しいのである。これはたとへ至難の道であつても實踐に時間的な連續の努力を要しない。自覺と決意が渾然衝動すれば、如來地に入る事洵に易々たるものであらう。

かくてこそたとへ美調に恍惚陶醉せしむる芳醇な藝の醍醐味は乏しくとも、比類なき大器に恵まれた人が、その持味をぎり／＼結着までのし上げ、磨き上げ、生かし切つた、まこと心の満ち溢れた藝境に、隨喜の涙をこぼし得るのである。魂を揺さぶられるやうな、心臓を掴まれて息の根を止められるほどのデカイ藝力に讃嘆を禁じ得ないであらう。

これは巨材を擁して小手先の利かぬものゝ行くべき、唯一無一の大道なのである。まこと心と止しき氣力を内包燃焼して、之を素晴らしい傳統に磨きぬかれた様式により、力強く表現するところに獨自の生命を持つ吾義大夫淨瑠璃は、君の大悟一番、渾心の精進努力による大成に俟つて、その本來の面目を一層輝かし得るのではあるまいかとさへ私には考へられる。刻下の吾帝國の現狀は國民個々に捨身の奉公を求めてゐるではないか。個人として發揮し得る最大限の力の綜合がよくこの未曾有の國難を超越し得るのであると信じる。

大隅大夫たるもの、心を虚うして私の苦言を容れ發奮努力すれば、これが何よりの藝道報國、職域奉公ではあるまいか？君もつて奈何となす矣。（完）